桃太郎（16）

「ほう、それはいさましいことだ。じゃあ行っておいで。」

　とおじいさんは言いました。

「まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞおなかがおすきだろう。よしよし、おべんとうをこしらえて上げましょう。」

　とおばあさんも言いました。

　そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭のまん中に、えんやら、

桃太郎（17）

えんやら、大きな臼（うす）を持ち出して、おじいさんがきねを取ると、おばあさんはこねどりをして、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」

　と、おべんとうのきびだんごをつきはじめました。

　きびだんごがうまそうにでき上がると、桃太郎のしたくもすっか

桃太郎（18）

りでき上がりました。

　桃太郎はお侍の着るような陣羽織（じんばおり）を着て、刀を腰にさして、きびだんごの袋をぶら下げました。そして桃の絵のかいてある軍扇（ぐんせん）を手に持って、

「ではおとうさん、おかあさん、行ってまいります。」

　と言いって、ていねいに頭を下げました。

桃太郎（19）

「じゃあ、りっぱに鬼を退治してくるがいい。」

　とおじいさんは言いました。

「気をつけて、けがをしないようにおしよ。」

　とおばあさんも言いました。

「なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから。」と桃太郎は言って、

「では、ごきげんよう。」

桃太郎（20）

　と元気な声をのこして、出ていきました。おじいさんとおばあさんは、門の外に立って、いつまでも、いつまでも見送っていました。

三

　桃太郎はずんずん行きますと、大きな山の上に来ました。

つづく